

14 Pattern of Life 人生のパターン 資料

資料1

シエマ [シエム] [schema, scheme] :

辞書的にいえば、シエマ（スキーマ）はある対象とか状況を要約した略図、図式であり、シエム（スキーム）は活動するための計画、プログラムの意味をもっている。バートレット[Bartlett, F. C.]は特定の図柄をもった対象を知覚する時には、その対象に応じた特定の態度（setting）、すなわち、意味を求める努力（effort after meaning）が現われることをスキームと呼んでいる。これに対してスキーマは過去経験、過去の反応様式が体制化されたもので、能動的なもののことを意味している。こうした用語が利用される根拠は、その心理学的過程が無意識的であることを強調しようとするためである。ピアジェでは知覚的事象が同化される時にシエマという用語が使われるが、感覚運動期で活動が同化されることをシエムとよんで区別している。前者が図式的であるのに対して後者は抽象的なものである。操作はもっとも一般的なシエムである。感覚運動期でシエムとよばれるものは、具体的操作期にはいれば操作とよばれる。フランス語の schéma は英訳されると schema となることが多い。

（誠信 心理学辞典 p164 より）

スキーマ（英語：schema）、**シエマ**（ドイツ語：Schema）、**シエマ**（フランス語：schéma）とは、もともと図や図式や計画のことを指す言葉で、今では様々な分野で広く用いられる言葉である。

「スキーム」（scheme）とスキーマはほぼ同じ意味であるが、一般にスキームが具体的にほとんど完成された計画や図を意味するのに比べて、スキーマはその手前のおおまかな（概念）状態を指すことが多い。ギリシャ語の $\sigma\chi\eta\mu\alpha$ が語源。（Wikipedia）

バートレット[Sir Frederic Charles Bartlett]

1886年10月20日 - 1969年9月30日）は、イギリスの心理学者。認知心理学の先駆者の一人。ケンブリッジ大学名誉教授。

もともと実験心理学者。第一次大戦頃は記憶の研究をしていたが、厳密な実験心理学的研究というよりはむしろ、日常場面における記憶の解析であった。彼の研究は記憶を過去経験の貯蔵庫として考える態のものではなく、再生に現われる変容を質的に解明する所に焦点があった。とくに再生を繰り返すことによって内容が次第に社会的文化的影響をこうむることを明らかにした。また、知覚の研究にも力を注いだ。彼の知覚の研究は刺激条件よりも主体的条件の分析に中心が向けられた。いわば社会的知覚の研究の先駆ともいえるべきものである。思考に関する研究も発表されている。記憶、知覚、思考のいずれの面を取り扱うにしても、かれはいわゆる実験心理学的観点によるよりは、むしろ社会心理学的視点に立っているところにその特徴がみられる。



著書：A Study in experimental and social psychology, 1932

資料2 Pattern of Life と Style of Life のちがい（区別）について

Pattern of Life p107 (2021/12/16 栗飯原さん担当部分) 原註3

アドラーは動作のパターンと法則に言及したが、個人心理学の文献には「人生のパターン」という言葉はライフスタイルとは異なる概念として登場していない。しかし、アドラーの著作の中には、この区別が推測できるものがある。「誰もが自分自身と人生の問題についての「考え」を持っており、それは人生のパターンであり、運動の法則であり、本人が理解していなくてもしっかりと掴んでいるのである。」…アルフレッド・アドラー『共同体感覚』。A Challenge to Mankind, trans. by John Linton and Richard Vaughan, New York: Capricorn Books, 1933, 27. また、アドラーは、「性格的特徴は、その人の動線の外側の形にすぎない。そのため、環境、仲間、コミュニティ、人生の問題に対するその人の態度を理解することができる。それは自己主張のための手段を示す現象である。それらは生き方の方法を形成するために結合する装置である」。Ansbacher and Ansbacher, 219. と強調している。

その 25 年後、ジッヒャーは、ライフスタイルと人生のパターンの違いに注目することで、アドラーの説明から推測されることを具体化した。彼女にとって、パターンは内的な出来事であり、アドラーの運動の法則の概念に対応するものである。ライフスタイルは観察可能であり、各個人が自分の目標に到達するために使用する方法を表している。

Pattern of Life 人生のパターン

人生のパターンとは、個人が人生のあり方について抱く見方、絵のことです。3 それは全体的な目標 (the overall goal) から導き出されます。人生のパターンは、内面的な出来事であり、他者との相互作用や身体的な状況との相互作用において人を導く価値観と社会的要請を含んでいます。

Style of Life ライフスタイル

ライフスタイルとは、個人が自分の人生のパターンを実現するために採用する全体的な方法です。これは、ここで挙げられている唯一の構成要素であり、行動を記述するものであるため、外見上、観察可能なものです。人生のパターン、ライフスタイル、全体的な目標の組み合わせは、子供の最初の数年間に始まります。人生のパターンとその外面的な表現であるライフスタイルは、個人が経験してうまくいくことを発見したものから構築されます。ライフスタイルを観察することで、架空の全体的な目標を推測することができます。

資料3 goal development 目標の形成

Early Childhood p111 (2022/1/20 井原さん担当部分)

子どもにとって大人になることとは、誰かが来てくれるまで待つ必要がないこと、大人と同じように力を持つことを意味します。こうして、子どもは何かじゅうぶんなものとして「大人であること」というアイデアを得ます。子どもたちは大人がどれほど不十分かが分かるほど賢くないので、ただ彼ら自身の不十分さと比較して考えます。このように子どもは、大人のようにじゅうぶんになり力をもつことを目標にします。

Extracting Ideals From Reality p111 (2022/2/17 中井さん担当部分)

私たちは、現実のある部分を抜き出して生きています。私たちが現実として見ているものは、進化の過程の一部なのです。私たちは進化の終着点を想定していますがそれは決して訪れないと知っています。進化の終着点とはすべての欠点や欠陥がなくなるゴールであり、完全なものに到達するという状態です。この仮定から、私たちはこうありたいという場所を具体化するのです。すべての人は、現実から一部を抜き出して、自分が現実として見ているもの、世界の未来の存在を認識して生きています。そして現実の一部を自分の生活領域とするのです。

Reachable and Unreachable Goals p113 (2022/3/17 伸さん担当部分)

理想は、それに向かって個人が動いていく一つの目標として現れる。自分に対して「もし私とその目標に到達できたら、そこで私は安全だろう。私は欲しいものと必要なもの全てを所有し、人々は私を愛してくれるだろう」と独り言を言うかもしれない。

Choice and Responsibility (p284)

Small children cannot be held responsible for their mistakes, but they are nonetheless responsible for their choices, the ideas that they build. The fact that they have mistaken ideas is unfortunate. Therefore, the grown-ups have to intervene with educational attempts to help the children correct their mistakes. These children are not guilty of making mistakes, they have misinterpreted the world out of misunderstandings that small children naturally have. They cannot be blamed for anything. They have to be helped to make better choices, to build up a better idea of a goal, therefore, to build up a more constructive style of life. They need to find better methods to reach whatever they want to reach. If their ideas are wrong, they need help in correcting these ideas.¹⁰ In Adlerian psychology, the word blame has no place.

小さな子どもは、自分の間違いに責任を持つことはできませんが、自分の選択、自分の構築したアイデアに責任を持つことができます。彼らが間違った考えを持つことは、不幸なことです。だから、大人が介入して、子どもたちが間違いを正せるように教育的な試みをしなければならなりません。子供たちには、間違いを犯すことに罪はなく、小さな子供がふつうに持っている誤解から、世界を誤って解釈してしまったのです。彼らには何も責められることはありません。よりよい選択をし、目標についてのよりよい考えを持ち、より建設的なライフスタイルを築けるよう、手助けがされなければならないのです。自分が到達したいものに到達するために、より良い方法を身につける必要があります。もし彼らの考えが間違っているなら、そうした考えを修正する手助けが必要なのです。アドラー心理学には、非難という言葉は存在しないのです。

資料4 構築主義と認知主義について

- ・『ライフスタイル分析の新しい方法 (3)』野田俊作論文集Ⅱ, p220 より

○構築主義と認知主義

構築主義的なライフスタイル理解は、伝統的に受け入れられてきたモザク (Harold H. Mosak) の認知主義的なライフスタイル理解と激しく対立する。モザクはライフスタイルを信念体系 conviction system であると定義した。それは、自己理想 self-ideal とよばれる「私は～でなければならない」という信念、自己概念 self concept とよばれる「私は～である」という信念、世界像 Weltbild とよばれる「人々は私に対して～である」という信念からできている。これらは認知構造として人の心の中に存在して、それが個人の行動や言葉を作り出すと考える。すなわち、形相因 causa formalis としての普遍のライフスタイルが存在して、それが変動する行為や言葉を作りだしているということである。

構造主義が認知主義を批判するのは、理論的な側面と実践的な側面があるが、理論的な側面については煩瑣 (はんさ) な議論があるので今は立ち入らない。実践的な批判としては、認知主義の治療法が、「アドラー心理学的考え方」とか「アドラー心理学的生き方」とかというような治療者が信奉している物語の押しつけだと思われるからである。モザクらの認知主義的なアドラー心理学解釈では、クライアントのライフスタイルの基本的誤り basic mistakes が話題になり、クライアントはそれを修正するように迫られる。これに対して構築主義的なアドラー心理学解釈では、クライアント自身がみずからの物語を再検討し、みずから語りなおしていく。すなわち、クライアントの性格の善悪良否を治療者が診断して、それを治療者がよいと思う方向に「治療」するのではなく、クライアント自身の力で語り直しができるように援助するのである。そうすることによって、治療者の信奉する物語をクライアントにおしつける危険を回避しようとしている。(後略)

・『ライフスタイル論をめぐる考察』野田俊作論文集Ⅱ, p235 より

西垣：構築主義ってなに？

野田：もともとは言語学から出てきています。ある文の意味がどうしてわかるかということ、その文を構成している単語のひとつひとつの意味がわかることと、次にそれらの単語の関係がわかることが必要ですね。

西垣：そうね。

野田：じゃあ、単語の意味はどうしてわかるかということ、他の単語との差異 difference でわかるのだと、言語学者ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913) が言いました。それにもとづいて、エピソードの中の単語を分析しました。そこから必然的に、各単語間の関係も明らかになります。このような、単語の意味や文の意味をなりたたせているしくみを構造といいます。

西垣：辞書とか文法みたいなもの？

野田：まあ、そうですね。そのような分析法を、社会現象を対象にして使うのを、構築主義といいます。

西垣：たとえば？

野田：挨拶を例にしましょうか。お友だちと会ったときと、子どもさんの担任の先生と会ったときと、ご主人の上司と会ったときと、お母さまの主治医と会ったときと、みんなご挨拶の仕方が違うでしょう。

西垣：それはそうね。

野田：なぜある場合にある挨拶をするのかは、理由はよくわからないんだけど、差異が伝統的に決まっているんですね。ちょうど言葉の文法のように。こうして社会現象を分析するんです。

西垣：ふうむ。それが構造主義ね。それは認知主義とはどう違うの？

野田：認知主義は、信念とよばれるものが心の中にあるのだと考えます。でも、誰も信念そのものを見た人はいないんです。これにたいして、構造は、心の中にあるのではなくて、たとえばエピソードの文の中や、儀礼の行為の中にあるんです。ちょうど文法のように。

西垣：文法も見えないわ。

野田：直接には見えないけれど、示してみることはできるでしょう。たとえば、「行く」という言葉は、否定するときはきっと「行かない」になって「行かない」にならないとか、「来る」という言葉は、否定するときはきっと「来ない」になって「来ない」にならないとか。

西垣：まあ、それはそうね。

野田：それと同じように、ある人の複数のエピソードについて、どれの中でも「何かをなし遂げようとする、かならず邪魔をする出来事がおこる」というようなことを示すことができます。

西垣：それは「人々は私の邪魔をする」という信念がある、ということじゃないの？

野田：心の中にそういう信念があるかどうかを、構造主義は論じていないのです。語られたエピソードの中に、そういう構造があると論じているだけなんです。

西垣：微妙な違いね。

野田：そんなことはありません。心理学が科学的であるためには、重要な違いなんです。構造主義の考え方だと、観察できない仮説構成体を使わなくて済むんです。見えないものについて話をしたくないんですよ。